【問い合わせ先】
海上保安庁海洋情報部沿岸調査課
課長補佐　南 宏樹
電話：０３－３５９５－３６０６
九州大学浅海底フロンティア研究センター
Mail：seafloor@scs.kyushu-u.ac.jp
広島大学大学院人間社会科学研究科（後藤秀昭）
Mail: hgoto@hiroshima-u.ac.jp

令和７年９月19日
海　上　保　安　庁

輪島港における昨年９月の奥能登豪雨の影響が明らかに

～九州大学等の研究グループとの共同解析を実施～

海上保安庁海洋情報部は、九州大学浅海底フロンティアセンター、(株)ワールドスキャンプロジェクト、広島大学、金沢大学と連携し、石川県輪島港の水深データを解析した結果、昨年９月に発生した奥能登豪雨により、輪島港の防波堤内で土砂が広範囲に堆積し、水深が最大 1.8m 浅くなっていることが分かりました（図１）。

令和６年９月に発生した奥能登豪雨（以下、豪雨）により、石川県輪島港には河川から大量の土砂が海に流れ込みました。この海域は、令和６年能登半島地震で発生した隆起により、地震前と比較すると水深が 1～1.5m 程浅くなっています。海上保安庁海洋情報部は、水深を正確に把握し、船舶の航行安全を図るため、令和７年５月８日から 23 日にかけて、測量船「明洋」により水深の調査を実施しました。

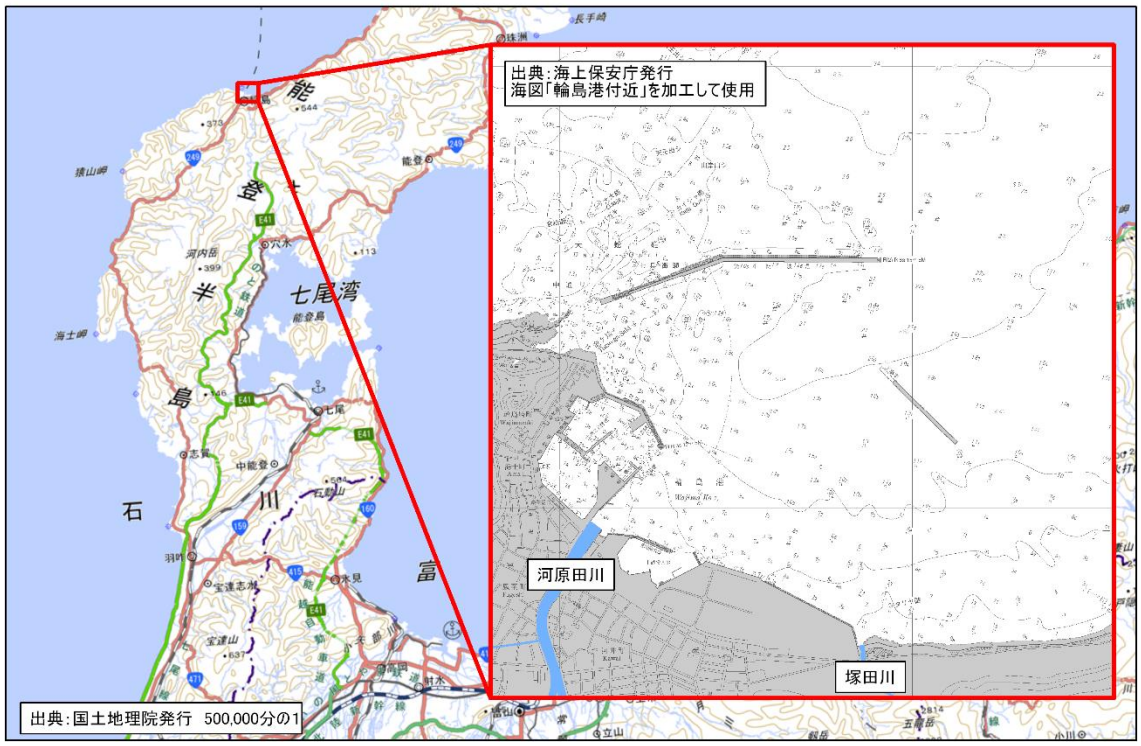
輪島港では、豪雨前の令和６年５月、九州大学、(株)ワールドスキャンプロジェクト、広島大学、金沢大学が共同で調査を実施し、水深データを取得していました（図２）。豪雨後に実施した当庁の調査結果のほか、北陸地方整備局からご提供いただいたデータも用いて、豪雨前後の水深変化を調べました（図３）。

豪雨前後における輪島港の水深データの比較の結果

１　河原田川河口沖では、土砂の堆積により、地震後の水深から最大 1.8m 浅くなり、大きさが数ｍの巨礫や人工物が多数散在していることが確認されました（図４）。豪雨の影響により、河口の延長上では、地震の隆起を超える規模の土砂の流入・堆積が起こったことが明らかとなりました。

２　塚田川河口沖では、豪雨前には岩石が露出していた場所が、豪雨後には土砂で埋もれたことが確認されました（図５）。塚田川の氾濫や海岸で斜面崩壊が発生し、土砂が流出した影響と考えられます。

海上保安庁海洋情報部では、豪雨後の調査の結果を海図に反映することで、輪島港を利用する船舶の航行安全に役立てていきます。



調査範囲図及び位置図

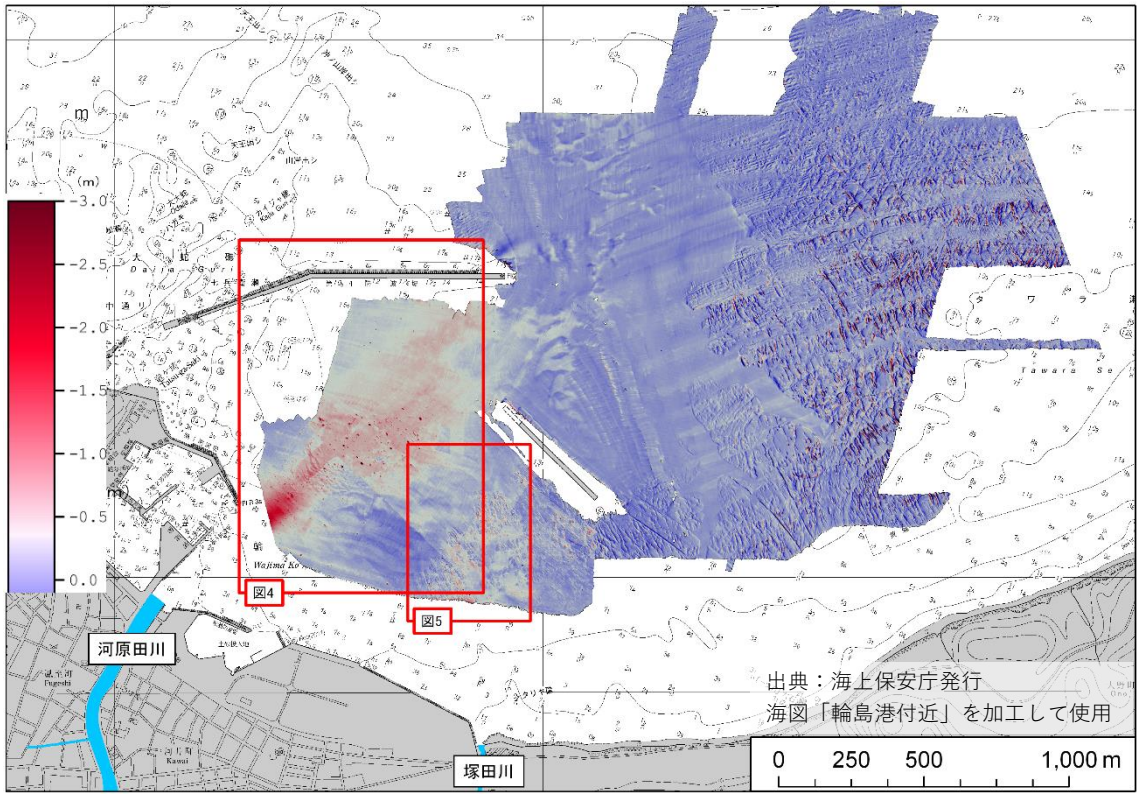


図１　輪島港における令和６年奥能登豪雨前後での水深変化図
（赤くなるほど水深が浅く変化している）

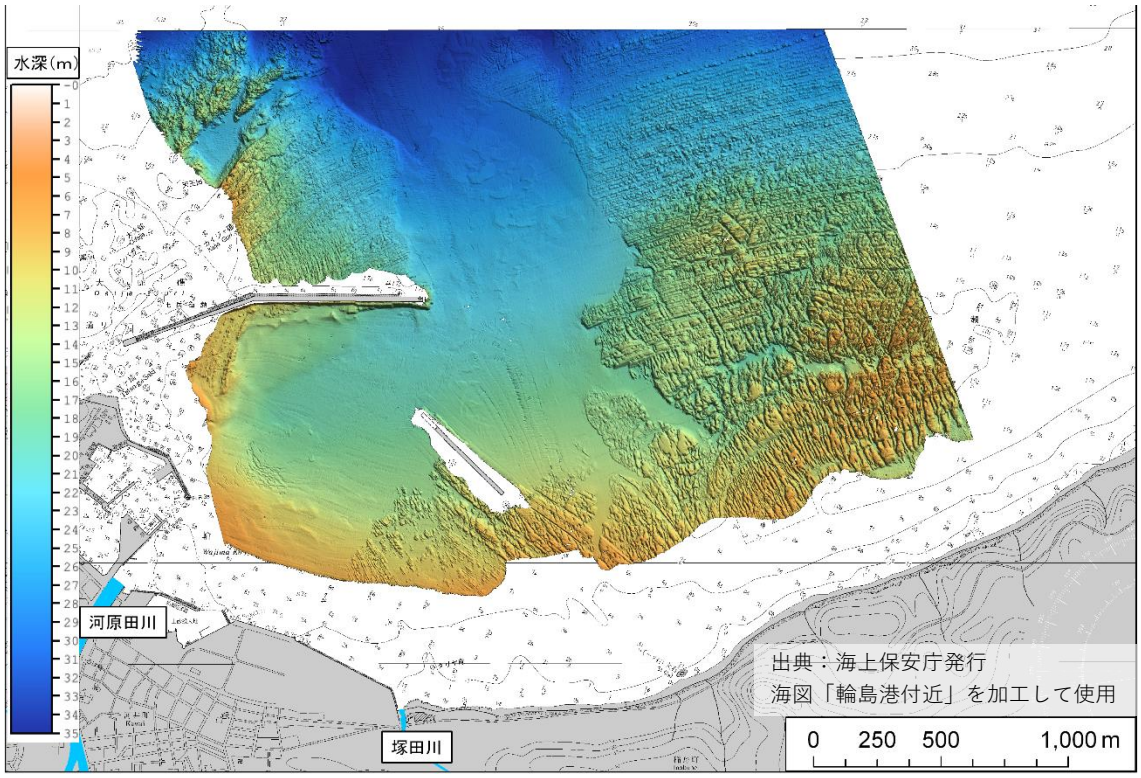


図２　豪雨前に九州大学等が実施した調査から作成した輪島港の海底地形図

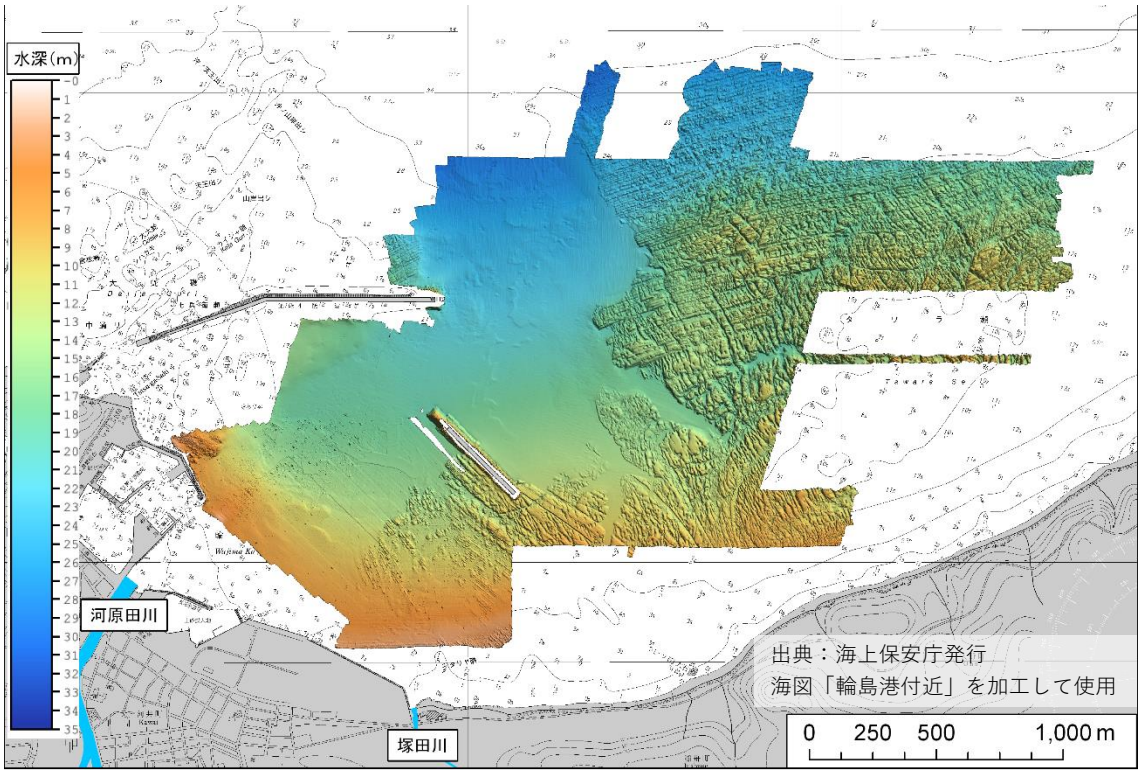


図３　豪雨後に海上保安庁及び北陸地方整備局が実施した調査から
作成した輪島港の海底地形図

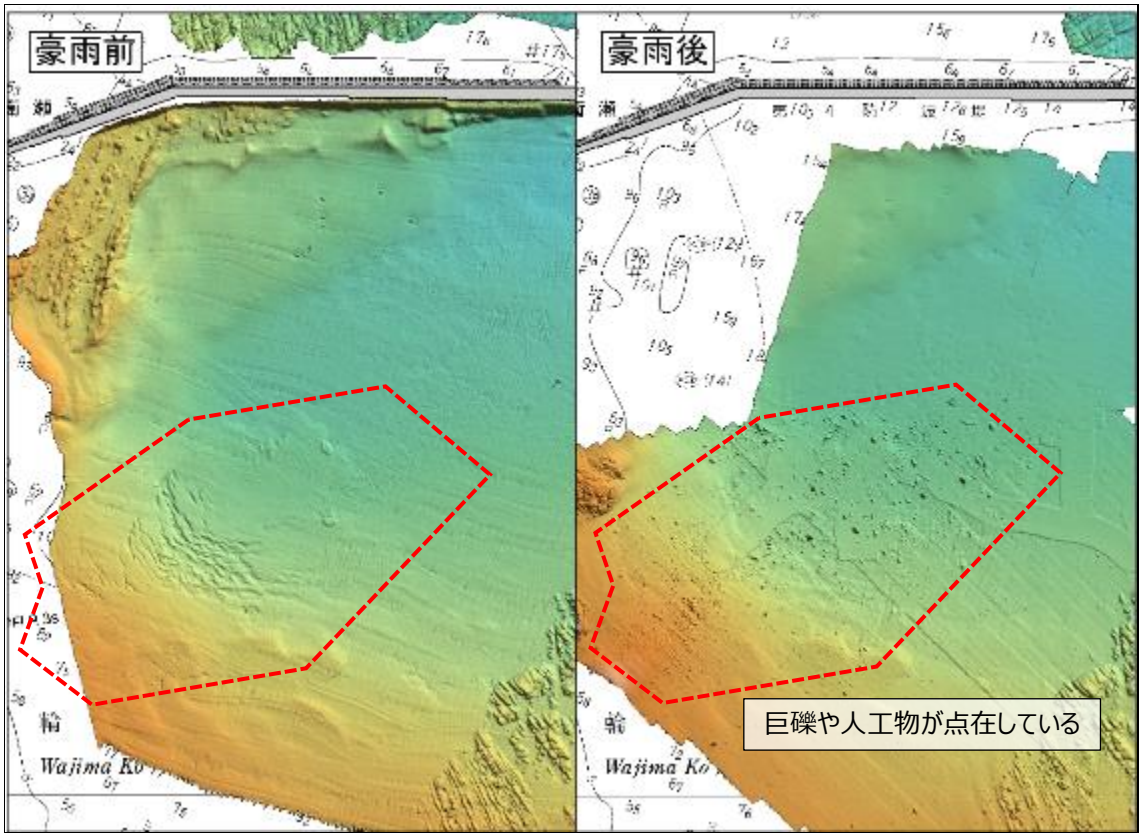


図４　河原田川河口沖での水深変化（左：豪雨前、右：豪雨後）

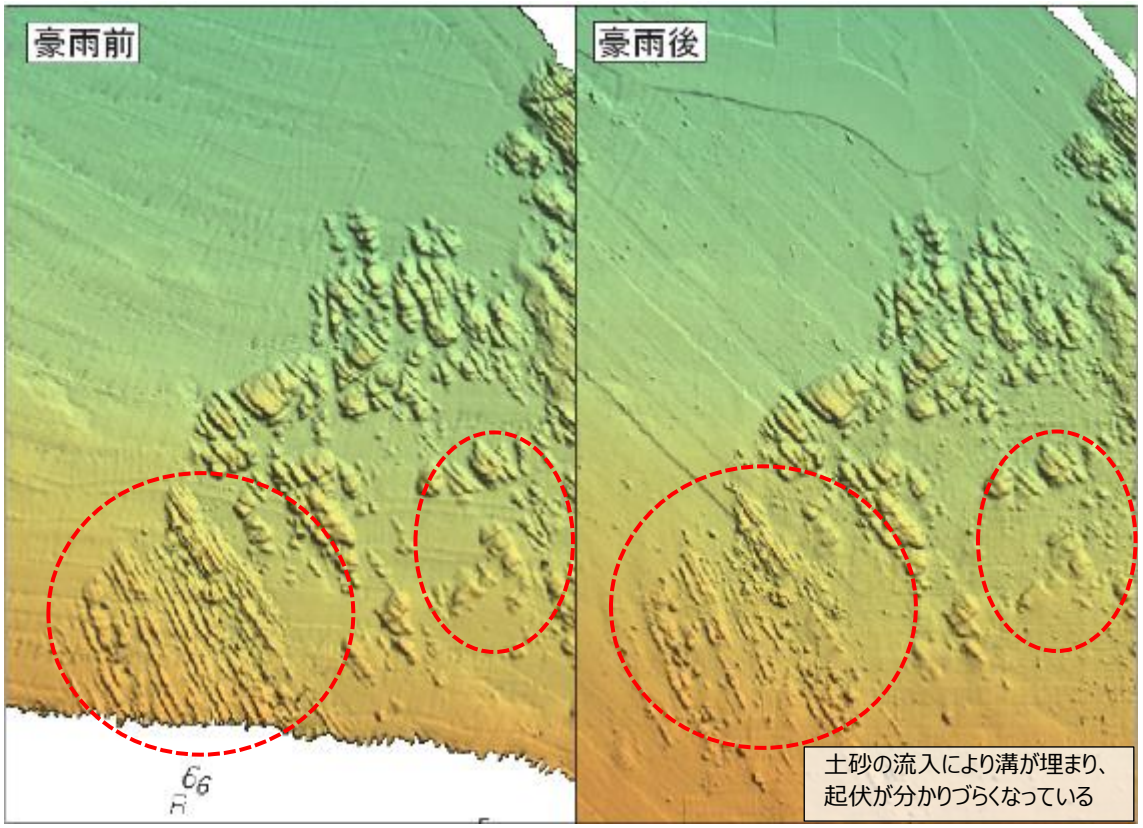


図５　塚田川河口沖での水深変化（左：豪雨前、右：豪雨後）